

4) 二群法での仮説の効果は、平均値の比較によって判定します。しかし、平均値というのは、全体の傾向を示す一つの数値にすぎませんから、平均値から個々の児童・生徒についてのくわしい情報を得ることはできません。したがって、このほかに、実験前、実験期間中、実験後のそれぞれの群の児童・生徒の観察記録なども判定の参考資料とするようにします。

研究報告書には、これらの記録のうち、代表的なものをのせるようにします。

5) 仮説の効果をも、無理して作って認めるようなことはしないようにします。効果が認められなかった、というのもひとつの立派な研究です。この場合には、原因となる問題点のおさえ方が甘かったのか、アイデア（解決策）の質が良くなかったのか、など十分検討して、後の研究に生かすようにしています。

6) 一群法、二群法ともに、仮説の効果をも測るものとして、テストの占める役割は極めて大きいものです。したがって、テストの問題は、真に仮説の効果をも測るものとしてふさわしい（妥当性のある）ものでなければなりませんから、事前に十分吟味して、ねらいに即した質の良い問題を作るようにします。

5. 研究報告書の形式

研究報告書には、一定の形式はありませんが、まとめるにあたって、つねに留意しなければならないことは、読む人に、正しく理解してもらえるように、わかりやすく書く、ということです。自分が何をいいたいのか、何を書きたいのか、自問自答しながら、そして自分が用いることばの意味を確かめながら、できるだけやさしく書くようにします。

次に、よく見られる報告書の形式を、参考までにのせておきます。

研究主題

① 研究主題設定の理由

○児童・生徒の実態から掘り起こした問題点の発見とその原因を追求